

ヘルペス脳炎と類縁脳炎・脳症

庄司 紘史 聖マリア病院神経内科主幹・久留米大学名誉教授

昨年度は、SAKURA でのアンケートによる後遺症を中心にまとめましたが、今回は聖マリア病院（久留米市）の 2002-2011 年の 10 年間、急性ウイルス性脳炎/脳症 92 例における単純ヘルペス脳炎（ヘルペス脳炎）と類縁脳炎・脳症を検討致しました。

ヘルペス脳炎とインフルエンザ脳症を中心に述べ、症候性てんかんでの車の運転についても触れます。

92 例の内訳は、ヘルペス脳炎 12 例、帯状疱疹に伴う脳炎 6 例、側頭葉てんかん・非ヘルペス性辺縁系脳炎など 5 例、抗 NMDA 受容体脳炎 1 例、インフルエンザ脳症 38 例、他 30 例でした（表 1）。

	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011/9	合計
ヘルペス脳炎	2	1	1	1	2(再発1)	1			3(再発1)	1	12
関連疾患	1(側頭葉てんかん)									HSV-2モラレ:2	3
帯状疱疹脳炎				3	2					1	6
非ヘルペス性辺縁系脳炎			2							0	2
抗NMDAR脳炎										1	1
インフルエンザ脳症	2	0	1	6	4	6	2	14	1	2	38
他のウイルス脳炎	1	3	10	4	4	3	2	1	1	1	30

ヘルペス脳炎 12 例について：乳児・小児例が 2 例と少なく、88 歳の男性例が存在していました。65 歳以上の高齢者の場合、基礎疾患を有していることが多く、肺炎等の合併症にも抵抗性が弱く対策が重要です。Polymerase chain reaction (PCR)・herpes simplex virus (HSV) 抗体による診断の問題点では HSV への PCR が第一選択の検査ですが、enzyme immunoassay (EIA) 抗体 (IgM, IgG) の場合、経時的な変動が追加される必要があります。発症時、6 例で痙攣、退院時抗痙攣薬が処方されていました。ヘルペス脳炎の約 30% の症例で残遺てんかんに移行致します。原則として 2 年間の運転禁止の措置が妥当と思われます。

加えて、中等度から重度の記憶・注意障害が残っている患者さんにおいては、日常生活の改善とともに車の運転再開を許可することになります。5年以上の長期の運転禁止も少なくありません。

一方、インフルエンザ脳症においては10歳以下の小児を中心に頻度が高いのですが、15歳以上の成人例7例存在していました（図1）。発生時期は11月から発生し、2月にピークがみられます（図2）。特に、ブタの変異株-新型インフルエンザ(A, H1N1)の流行した2009年に一致し、成人例の増加がみられました（図3）。多くは言動異常、痙攣発作で発症し、4例に大脳辺縁系にMRI異常が認められました。インフルエンザ脳症に30%程度の熱性けいれんや熱性せん妄が含まれていますが、成人での発生もみられ、画像上大脳辺縁系に異常所見が見いだされた点、注目されます。

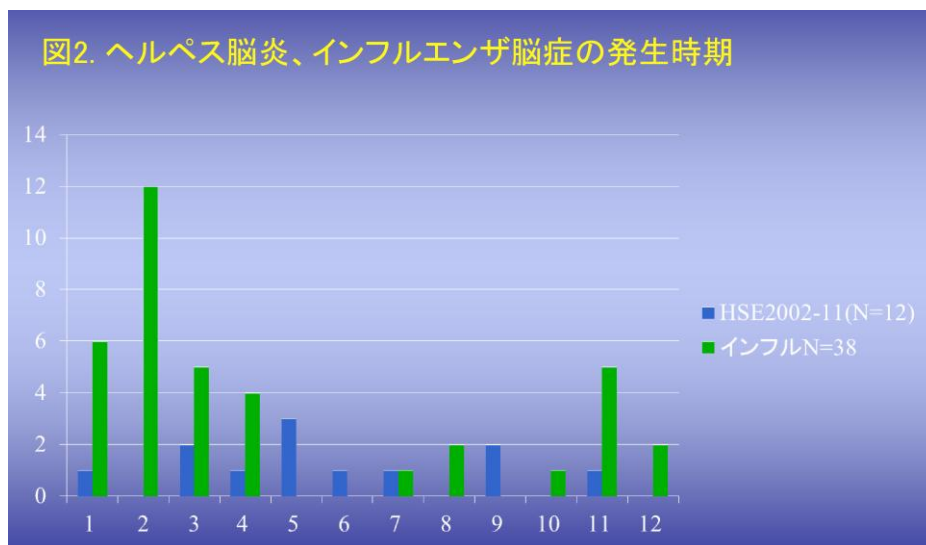
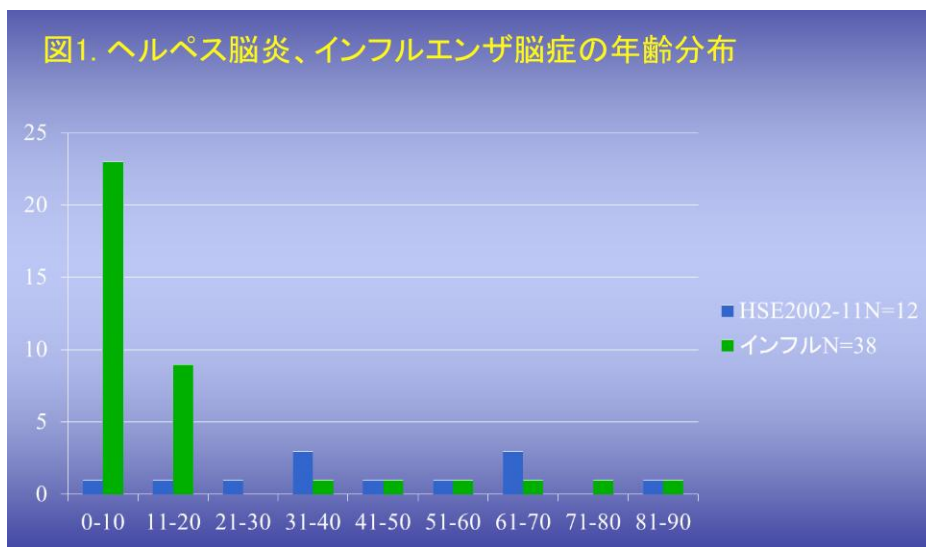
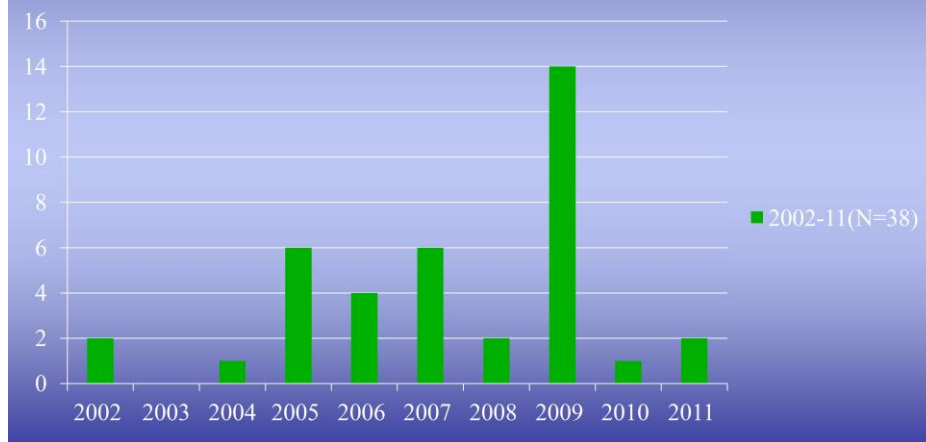


図3. インフルエンザ脳症の年度別発生



まとめ

聖マリア病院（久留米市）における 2002-2011 年の 10 年間、急性ウイルス性脳炎/脳症 92 例を検討致しました。

ヘルペス脳炎 12 例において：乳児・小児例は 2 例のみで、高齢化の傾向がみられ、88 歳の超高齢者が存在し、高齢者の場合、肺炎の合併症への対策等が重要です。インフルエンザ脳症： 新型インフルエンザ (A, H1N1) の流行した 2009 年に一致し、成人例の増加がみられました。異常言動、痙攣発作で発症、画像的には大脳辺縁系に主座を有し、ヘルペス脳炎との鑑別にも注意を払う必要があります。